

グラントシマウマの削蹄とその後の経過

○小林 智男、船藤 史

横浜市立よこはま動物園では、グラントシマウマ *Equus guagga boehmi* を 6 頭（雄 2 頭、雌 4 頭）飼育している。今回、そのうちの 1 頭において、当園で初めて麻酔下での削蹄を実施したため、一連の経過について報告する。

実施個体は、No.4 雌（個体名：カナコ 8 才）で、2019 年 3 月 21 日に両前肢の蹄壁に亀裂が確認された。亀裂部からの出血や跛行が見られなかったため、当面の間経過を観察していた。しかし、日を迫うごとに蹄尖部が反り返って伸び始め、歩様についても徐々に悪化傾向にあり、軽度の跛行が認められるようになった。そのため、同年の 6 月 13 日に麻酔下で装蹄師による患肢を含む四肢全ての削蹄を実施した。

今回、当該個体の蹄の状態が悪化した一因として、繁殖制限による飼育環境の変化が考えられる。グラントシマウマは、サバンナエリアのオープン当初は混合展示場にて終日雌雄同居を行っていた。しかし、2016 年に産まれた子の成長に伴い獣舎の小間が不足したことにより、2017 年 5 月 29 日から展示場での雌雄同居を中止し、以降は雄群と雌群を日替わりで展示場に放飼していた。これにより、展示場で過ごす日数が半減し、一方で床の硬いバックヤードで過ごす時間が増えたため、蹄に負荷がかかり裂蹄が生じ、患肢での負重や歩様が変わったことで過長蹄に至ったのではないかと推測される。